

ある定義し難いジャンル概念 — ドイツ語圏社会小説研究への批判的注釈 —

杉山 東洋

はじめに

第二次世界大戦終結から三年後の1948年に、「社会小説 (Der soziale Roman)」と題された短い記事がドイツの文芸誌『世界と言葉 (Welt und Wort)』に掲載された。記事の著者であるヘンマーリンクはそこで、当時の状況に条件づけられた定義をこの文学ジャンルに与えている。

西洋文学の偉大なる遺産を自身の叙事的作品の中に生き生きと保っていた同時代のイングランドや合衆国の作家たちは、社会小説のうちに理想的な世界市民の実現の可能性を見た。またアップトン・シンクレアのような、彼らのうちの最も重要な代表格の人物たちは、社会的諸力を巡る彼らの知を公にし、ロシアにおけるゴーリキとその子弟たちや、ドイツやスカンジナビア、イタリアでその他の者たちが行ったように、自分たちの創作を新しいフマニテートのために役立てた。¹

この引用の中で名指された作家たちは、ヘンマーリンクによって西洋全体から選び出されており、「新しいフマニテート」に従事するとされている。そして詩人が「実存のありとあらゆる深淵を通して人々をむち打って」、「彼らの望みが潰えた絶望の状態が完全なものとなったかに見える」時、詩人はこの世界市民的理想を人々に示す存在となるのだという。² 個人の生活水準が著しく低下していた戦後ドイツの状況下で、「社会小説」というジャンルはこのように肯定的に評価されていた。そしてその際このジャンルへの理解は、19世紀中葉におけるそれとは異なる、世界規模の大戦という時代状況に結びつけて更新されていた。

社会小説という小説ジャンルと時代状況とのこうした関連を、以下本論ではジャンルの成立期に遡って多角的に確認、考察していくこととなる。もっとも、ドイツ語圏における社会小説

¹ Haemmerling, Konrad: Der soziale Roman. In: *Welt und Wort* 3 (1948), S. 5-7, hier S. 7. ここで述べられている「同時代」は、文中に挙げられるシンクレア及びテオドーア・ドライサーやドス・パソスといった作家の主な活動時期を考慮すると、第一次世界大戦の終結後から同論発表までの30年間を指すと推測される。

² Ebd.

の文化的、社会的及び歴史的背景は、すでに今日に至るまで少なからず議論の対象となってきた。1998年に社会小説の解説を手がけたアードラーは、1840年代のドイツにおける社会小説の発展過程を示す際、社会小説とそれに対する批評との間の双方向的な作用を素描することに成功している。³ 彼はここで、このジャンルが1840年代における大衆窮乏のような社会的諸問題との関連で初めて論じられることとなったということを確認している。しかしこの言語芸術の歴史性を理解するためには、社会問題と社会小説の同時発生をむしろ、当時のドイツ語圏への「社会的 (sozial)」という言葉の流入から出発して考えなければならない。⁴

「社会的 (sozial)」という言葉は、18世紀末にフランス語 (social) から借用される形でドイツ語となった。⁵ はじめこの形容詞は、社会集団にかかわるという意味をもつ「社会的 (gesellschaftlich)」というドイツ語と同義であったが、1830年代ごろから政治的な意味を帯びはじめた。⁶ 「社会主義 (Sozialismus)」の興隆に導かれ、世紀中葉にはフェルディナント・フライリヒャルトのような詩人たちが「社会叙情詩 (soziale Lyrik)」を書き始め、時を同じくして「社会学 (soziale Wissenschaft)」が独立した学問分野として登場する。そしてそのような状況下で「社会問題 (die soziale Frage)」という、近代化に付随して生じた社会的諸問題を指し示す包括的な概念が成立した。⁷ 「社会小説」というジャンル概念もまた、「社会的 (sozial)」という新しい形容詞から派生したこうした言葉のうちのひとつであった。⁸

しかし社会小説の曖昧さは実のところ、ジャンル名称のこうした成立背景にのみ起因するものではない。すなわち、19世紀に議論された社会小説という文芸区分は、成立当時から今日に至る議論の過程で、複合的な定義し難さをその特徴として有することとなったのである。この

³ Vgl. Adler, Hans: *Der soziale Roman*. In: Sautermeister, Gert / Schmid, Ulrich (Hrsg.): *Zwischen Restauration und Revolution 1815-1848*. München 1998, S. 195-209. この文献は、社会小説一般を扱った研究としては最も新しいものである。社会小説の研究史全体については、第二章で包括的に取り上げる。

⁴ アードラーの論考は今日の研究基盤を形づくるものだが、ここで社会小説というジャンル概念の新奇性は、言及こそされているものの十分に説明されないままとなっている。「三月前期の小説——そしてまたその他の語りの形式——における社会的諸問題の表現は新しいものではない。新しいのは社会小説という概念であり、1840年代におけるこのジャンルの生き生きとした進展である」。Ebd., S. 195.

⁵ Vgl. Art. „sozial“. In: *Deutsches Fremdwörterbuch*. Begonnen von Hans Schulz, fortgeführt von Otto Basler, weitgeführt im Institut für deutsche Sprache. Vierter Band, Berlin / New York 1978, S. 288-293, hier S. 288.

⁶ Vgl. Art. „sozial“. In: Paul, Hermann: *Deutsches Wörterbuch. Bedeutungsgeschichte und Aufbau unseres Wortschatzes*. 10., überarbeitete und erweiterte Auflage von Helmut Henne, Heidrun Kämper und Georg Objartel. Tübingen 2002, S. 928-929.

⁷ Vgl. Zimmermann, Waldemar: *Das „Soziale“ im geschichtlichen Sinn- und Begriffswandel*. In: *Studien zur Soziologie*. Festgabe für Leopold v. Wiese aus Anlaß der Vollendung seines 70. Lebensjahres. Bd. 1. Mainz 1948. S. 173-191, hier S. 180.

⁸ このような事情から、「社会小説」という名称をひとつのジャンル名としてではなく、「社会的 (sozial)」という形容詞を伴った「小説 (der Roman)」と見なすこともまた正当に思われる。本論においてはしかし、同時代の批評や後年の研究において、その言葉がジャンル名として扱われてきたことを踏まえ、「社会小説 (der soziale Roman)」を小説の下位ジャンルと見なす。またその名称が言及される際には、必要に応じて原文の表記を併記する。

ことを明らかにするために、本論ではまず第一章で、19世紀中葉の「社会小説」言説を確認したうえで、当時の「長編小説 (der Roman)」という形式それ自体が有していた多様性にも目を向け、成立期の社会小説というジャンル名に含まれていた意味内容の把握し難さについて述べる。そのうえで第二章では、ジャンル定義の困難さという観点から、社会小説の研究史を最初期にあたる1930年代から通時的に捉え直していく。ここで導き出される社会小説に特有な概念定義の問題は、これまでほとんど議論の対象とされてこなかった地域や作家の作品テキストに、社会小説研究の余地が残されていることを示してくれるだろう。そのことを指摘するために第三章では、19世紀半ばのオーストリアの詩人たちによる社会小説への言及を確認する。その中でもとくにシュティフターの発言を集中的に取り上げ、作家研究の知見も援用しながら考察の対象とすることで、今後の研究の展望を示したい。

1. 1840～50年代のドイツ語圏における社会小説理解

ドイツ語圏で「社会小説」という小説ジャンルが初めて理論立てて語られるのは、1840年代前半のことである。ただし、冒頭で述べたように「社会的 (social)」という語から派生した専門用語が広がっていく中で、1830年代にはすでにこの形容詞が批評テキストの中で用いられていた。フランス文学の長所を「滑稽な、社会的な (social[])、扇情的な、あるいは徹底して歴史的な物語」⁹に見出すというその証言は、同時代イングランドの小説『ポール・クリフォード』(1830)のドイツ語訳への書評であり、それから十年ほどして花開く社会小説批評の基本理解を垣間見せている。つまり、フランス文学を社会小説の手本とする見方が、1840年代の社会小説論には共通して見出せるのである。

アードラーが編集を担当した社会小説論集によれば、1845年に書かれた「社会小説 (der soziale Roman)」という呼称を使用する二本の短い書評は、同時代における代表的なジャンル定義を伝えている。¹⁰ それらはどちらも、ウージェーヌ・シュエ (1804-1857) の『パリの秘密』(1842-43)という長編小説を扱っている。『パリの秘密』は、大都市パリの下層社会を舞台に貴族ロドルフとその仲間たちが、悪事に身を染める様々な人物との対決を繰り広げ、社会の「秘密」を暴き出す新聞小説である。同作の内容に即して、当時、社会小説は「民衆の生活における根源的な真実」¹¹を新たに描くジャンルと見なされていた。そして、「非社会的圏域 (d[ie] unsoziale[]

⁹ Paul Clifford. Vom Verf. des „Pelham“, des „Verstoßenen“ und „Devereux“. Uebersetzt von C. Richard. 3 Theile. Aachen, Mayer. 1830.12.4 Thlr. 12 Gr. In: „Blätter für literarische Unterhaltung“, Nr. 16 (16. Januar 1831), S. 67-68, hier S. 67. 同書評は、ドイツ語圏における社会小説の受容を示す以下の資料集にも収録されている。Vgl. Bachleitner, Norbert (Hrsg.): *Quellen zur Rezeption des englischen und französischen Romans in Deutschland und Österreich im 19. Jahrhundert*. Tübingen 1990, S. 149-151.

¹⁰ Vgl. Adler, Hans (Hrsg.): *Der deutsche soziale Roman des 18. und 19. Jahrhunderts*. Darmstadt 1990, S. 16f.

¹¹ Vgl. *Mysterien-Literatur*. In: „Blätter für literarische Unterhaltung“, Nr. 2 (2. Januar 1831), S. 5-7, hier S. 7.

Welt)」を描き出す形で、社会的圏域の不在を批判する「社会批判 (soziale Kritik)」が、社会小説の眼目として認識されていた。¹² 近代化された新しい社会を生きる様々な階級の生活を、政治的な批判を目的として描くという社会小説理解が、このように当時大流行を巻き起こしたシューの『パリの秘密』を基準にして形づくられていった。そしてその定義づけの過程自体において「社会的 (sozial)」という形容詞が繰り返し使用されたことで、この外来語そのもののイメージもまた、社会小説と同時に新しく把握されていったといえよう。結果としてこれらの短い書評に現れる「社会的圏域 ([die] soziale Welt)」のような言葉からは、その具体的な指示内容が読み取りづらくなっている。19 世紀当時の「社会小説」言説には、「社会的」というドイツ語の新しさに起因する不明瞭さが含まれており、フランスの文化と思想はそのなかで、具体的な参照項として機能していたのである。¹³

しかし 1848 年の諸革命以降には、このジャンルに対する見方がドイツ語圏で新たに更新されることとなる。復古体制下で様々な政治思潮が活発化した三月前期に自由主義的な文芸批評を手がけていたヴィルヘルム・ハインリヒ・リールは、革命の挫折に失望し、1850 年代にはもはや社会小説の批判的作用を信じなくなっていた。そこから出発した彼の同ジャンルに対する理解は、1851 年に『アウクスブルク一般新聞』に寄せられた短い記事の中で示されている。「社会小説 (der sociale Roman)」と名付けられたこの随筆の中でリールは、このジャンルを「社会的現象 (ein sociales Phänomen)」と捉えている。¹⁴ 社会小説の刊行を同時代の出来事として見なすとき、ほとんどすべての言及されるべき物事は「最奥の核に従えば社会小説に属する」¹⁵ 小説の中に登場すると彼は述べている。社会小説が 19 世紀以来の現象であることを、リールはまた彼自身による「社会 (Gesellschaft)」概念の新たな方向付けから出発して論じている。「今日まだ十人の内九人は「社会」小説と聞くとすぐさま「社会主義的」小説を想起する」¹⁶ と、当時の「社会的 (sozial)」という言葉の曖昧さがもたらしていた誤解についてリールは嘆いているが、彼にとって社会小説とは、近代における「国家 (der Staat)」と「社会 (die Gesellschaft)」の区別に随伴した現象であった。そのため彼によれば、国家に対置される「社会」という概念が欠けていた 18 世紀には、社会小説が存在していなかったという。¹⁷ しかし、その後 19 世紀

¹² Vgl. Karl Grün: Ein Urteil über die „Geheimnisse von Paris“. In: *Neue Anekdoten*. Darmstadt 1845, S. 144-148, hier S. 144f.

¹³ 1844 年に書かれたルートヴィヒ・マイヤーの評論『社会小説』では、同時代のフランス文学だったジョルジュ・サンドの作品に依拠しつつ、1789 年のフランス革命にまで遡り、同国の文学と歴史に依拠した社会小説の定義づけが試みられている。Vgl. L.[udwig] Meyer: Der sociale Roman. In: *Wigand's Vierteljahrsschrift*. Erster Band (1844), S. 132-163, bes. S. 137.

¹⁴ W.[ilhelm] H.[einrich] R.[iehl]: Der sociale Roman. In: Adler (Hrsg.), a. a. O., S. 311-317, hier S. 312. 強調は原文。

¹⁵ Ebd. 強調は原文。

¹⁶ Ebd., S. 313.

¹⁷ Vgl. Ebd.

に成立した社会小説に対するリールの理解は、この時代における工業の発展のようなヨーロッパ内の社会的変化だけでなく、自明のものとして固定された秩序としての身分制社会に基づいている。

これは誠に重要な事柄ではないだろうか？ 我らの詩人たちは、個々人をもはや特定の社会集団の局所的な声の集まりとしてしか描くことができない。以前には一般的な色男、英雄、悪役などと呼ばれていた類型的な登場人物たちは、社会集団に属している場合、集団の尺度に即して (*gesellschaftlich*) 個人化された人物たちという全く別様の立ち位置を与えられる。全くの自然らしさと不自然さの中にいる農民たち、高貴な人々と成り上がりたち、市民、ブルジョワジーと俗物、職人、労働者とプロレタリアといったように。¹⁸

このリールの見解においては、近代社会を構成する様々な人物像が認識できる。そしてそうした社会に属する全ての人間は、「特定の身分の色調」¹⁹ に即して整理され、理解されている。

こうした見方は、リールの同時代人であった美学者フリードリヒ・テオドーア・フィッシャーによって、一層強固なものとされていった。彼は、1857年に初版が発行された体系的美学研究書における小説 (*der Roman*) という形式についての一節を「貴族的、民衆的小説、市民的、歴史的、社会的 (*sozial[]*)」小説という形に分割している。²⁰ ここで長編小説は、個々の作品における素材の範囲と同時に、描かれた主要人物たちの身分にしたがって整理されていることが分かる。

素材の領域に従い分類されて、長編小説は広範にわたり私生活を舞台とし、ここで詩的なものを探る。それは狭いものであれ、優遇された集団内での、広い意味での美しきフマニテートの獲得を表現するためであれ、貴族社会の中でのことだ。あるいはまた、その形式に対して常に更新される反対勢力ではあるものの、民衆の中や、はたまた教養ある市民の中、特にその家族生活の中でのことでもある。そうしてこのジャンルは、この上なく広い位置を占めている。²¹

¹⁸ Ebd., S. 312f. 強調は原文。

¹⁹ Ebd., S. 313. 社会思想史の認識においては、近代市民社会の構成員は「身分 (*der Stand*)」ではなく「階級 (*die Klasse*)」という概念のもとで把握される。しかしリールの場合、彼の復古的イデオロギーに基づく社会観ゆえに「身分」という概念が近代社会の分析に用いられている。

²⁰ Vischer, Friedrich Theodor: *Aesthetik oder Wissenschaft des Schönen*. Dritter Teil, Zweiten Abschnitt. Stuttgart 1857, S. XII.

²¹ Ebd., S. 1310f.

このような階級区分に従って分類される市民社会と、それを通じて見えてくる「社会制度 (die Einrichtung der Gesellschaft)」²² とを問いたただすのが、フィッシャーの考える社会小説である。その例としてここではインマーマンの『エピゴーネン』(1836) と、ジョルジュ・サンドの名が示される。両者についてのフィッシャーの指摘は、社会に対して批判的であるという共通の政治的傾向があるというものであり、同時代のフランス文学という初期の社会小説理解の枠組みを越え出ている。社会小説が民衆小説や市民的な小説の中に「多かれ少なかれ特定の芽のかたちでまどろんでいる」²³ ように見えるという彼の文からも、社会小説の政治的傾向という性質が、19世紀の社会における市民のような階級概念に基づいて認識されていることが分かるだろう。自由主義的な政治思潮がドイツ語圏で力を失い始める1848年以降には、社会小説は「社会的」という語彙の流入してきた文脈を離れて、市民社会の身分制秩序を表現するものというその特定の性格に焦点が当てられていったのである。

本論冒頭でも述べた通り「社会的」という語は、当時多種多様な専門領域で急速に用いられはじめ、その使用過程で徐々に意味内容を豊かにしていった。しかし、社会小説が成立する直前の時期には「小説 (der Roman)」という言葉もまた、多様なものとして捉えられていた。この事実についてもここで述べておかななくてはならない。

「小説の領域ほどに、かくも多様に組み上げられ、かくも高度に分かれている文学 (Dichtung) の分野を我々は知らない」という文章で、1827年刊行の事典における「小説 (Roman)」の項目は始まっている。²⁴ この項目の執筆担当者は、小説を英雄詩に対置させる。そこでは両者の違いとして、「韻文で書かれた小説、あるいは散文で書かれた英雄詩などナンセンスである」と述べられている。²⁵ ここで「小説」という文芸ジャンルは、散文の形式によって特徴づけられている。このことはまた、小説の多様性の基盤を成している。内容面からみれば、英雄詩の中には出来事自体が「小説においてよりもより豊かに、そしてより種々様々に」描かれるという。しかし、その表現方法は押韻の規則によって「押さえつけられている」。²⁶ その英雄詩に対し、小説は人間の性格を「心理学的に」表現する。そしてその際「小説は、一貫してただ散文の言葉でのみ存在することができ、大体において何よりも、落ち着きをもって流れる、高貴で、質素なわけではないがこの上なく透き通って柔らかな言葉を愛する」という。²⁷ そうした性質ゆえに、小説は書簡体や対話篇のような種々雑多な形式をとって書かれ得るのである。²⁸ この事

²² Ebd., S. 1315.

²³ Ebd., S. 1314f.

²⁴ Art. „Roman“. In: *Allgemeine deutsche Real-Encyclopädie für die gebildeten Stände. (Conversations-Lexikon.) In zwölf Bänden.* Neunter Band. Leipzig 1827, S. 875-883, hier S. 875.

²⁵ Ebd., S. 875.

²⁶ Ebd., S. 876.

²⁷ Ebd., S. 877.

²⁸ Ebd.

典項目が明らかにするように、19世紀前半には小説それ自体が、多様性を備えた文学的形式として定義されていた。

1830年代に入ると、以上のような小説観に即しながら、小説よりさらに大きな文学の枠組みである散文が、時代に即した表現技法として主張されるようになっていく。すでに認識されていた韻文と散文の対立という問題については、この時期にルドルフ・ヴィーンバルクやハインリヒ・ラウベのような急進的作家たちによって、散文の新しさ、優位性が語られる形で議論の対象となっていた。また当時は諸外国の情報を読者に届けるジャーナリズム的文書が人気を博しており、ハインリヒ・ハイネの『旅の絵』(1826-31)に代表されるそうした旅行記においては、日常言語としての散文が、政治的主張を展開する上で効力を発揮していた。²⁹ こうした状況下でテオドーア・ムントは、彼の著作『ドイツ散文の技法』(1837)において「散文の解放 (Emancipation der Prosa)」、すなわち「詩 (Poesie) と散文が本質的に対等となること、あるいはむしろ、ただ考えに従うという散文の表現の自由」を要求した。³⁰ 散文の構成要素である「文 (der Satz)」は、ムントによれば「完全な生きた組織体であり、見かけの、そして明るい現象のあらゆる長所が合一する動的な性格描写」³¹ であり、諸芸術のもつあらゆる効果を兼ね備えた技巧である。文における主語と述語は「完全な生の形姿」を表現し、動詞は「それらの歩みを進めさせる」ように理解され、文が形づくる歩みは、「リズムの魔法たる音楽」となる。³² このようなムントの理解するところの「文」は、「修辭的、文体的な彫刻を施されずとも、内容それ自体から否応なく湧き出す芸術的性格」³³ を有している。そして、韻律に縛られない「散文の自由なリズムのなかでは、魂の動的な熱情が最も意味を持って存在することができる」。³⁴ ムントはこのように、動的な対象を捉える自由なリズムを、諸芸術の長所を含み持った散文の特質として高く評価していた。

こうしたムントの主張は、彼の小説 (der Roman) に対する理解にもつながっている。彼によれば小説という芸術形式においては、「現実の社会 (gesellschaftlich[]) 生活に対する散文の言葉ならではの懐の深さが、詩的ジャンルとして形づくられる」。³⁵ 小説においては、叙情的なものや劇的なものといった様々な文学の要素が溶解しひとつになっており、ひとまとめにされている。そうしてこのジャンルが「あらゆる方向へ延びゆく人間の全体像」を追い求める時、散文

²⁹ Vgl. Brokoff, Jürgen: Prosareflexion und das Schreiben von Prosa nach dem ‚Ende der Kunstperiode‘ (Theodor Mundt, Heinrich Heine). In: Efimova, Svetlana / Gamper, Michael (Hrsg.): *Prosa. Geschichte, Poetik, Theorie*. Berlin / Boston 2021, S. 225-236, hier S. 225f.

³⁰ Mundt, Theodor: *Die Kunst der deutschen Prosa. Aesthetisch, literaturgeschichtlich, gesellschaftlich*. Berlin 1837, S. 49.

³¹ Ebd., S. 120.

³² Ebd., S. 121.

³³ Ebd.

³⁴ Ebd., S. 122.

³⁵ Ebd., S. 356.

は小説の「全ての状態を統一する総合組織」として、小説が統一された芸術として成り立つよう機能する。³⁶ ムントにとって散文は、多様な要素からなる小説に適した形式だったのである。

以上の通り、社会小説という文芸ジャンルが 1840 年代にドイツで認知され始める以前に、このジャンル名称を構成する「社会的 (sozial)」と「小説 (der Roman)」というドイツ語は、新たな評価を受けていた散文という文学形式の隆盛の過程と絡み合いながら用いられ始めていた。小説は 19 世紀前半においてその形式の多様さから、非常に豊かな可能性を有した散文という表現技法の代表として理解されていた。そして、旅行記のような当時流行した散文作品は、多くの学問、知識を西欧諸外国からドイツへともたらず役割を果たし、そうして「社会的 (sozial)」という新たなドイツ語が大衆向けの活字媒体の中で急速に広まっていった。³⁷ その延長線上で、「社会小説」という文学ジャンルは生じていたのである。しかし散文の多様さとは別の点で、社会小説は、その定義し難さを獲得していくこととなる。1840 年代から 1850 年代に入ると、同時代フランスの思想文化を範とするという社会小説理解は、市民社会の階級区分に即した人間描写というものに急速に変化した。しかも前者の理解に基づく批評においては、社会小説の説明の際に「社会的 (sozial)」という形容詞が意味を明示しないまま多用されていた。この時期のドイツ語圏における社会小説は、その前史も含め、概念として、そしてそれとは別に文芸ジャンルとして、曖昧さを抱えるものであったのである。

2. 1930 年代以降の社会小説研究におけるジャンル定義の問題

本章では、19 世紀中葉にドイツで語られ始めた社会小説が、文学研究の中でどのように扱われてきたのかを、主にそのジャンル定義の観点から整理していく。1960 年代までの社会小説研究においては、今日当該ジャンルに分類される作品がまだ社会小説としては扱われず、そもそも社会小説として論じられ得る作品に光を当てることに力が注がれていた。エーリヒ・エードラーの博士論文『ウージェーヌ・シューとドイツの秘密文学』(1932) では、シューの長編小説『パリの秘密』と、ドイツ語圏におけるその模倣作が取り上げられている。³⁸ 既に確認したよ

³⁶ Vgl. ebd., S. 356f. なお同じ散文の文学ジャンルであるノヴェレ (die Novelle) は、小説、つまりロマン (der Roman) と比較して「小宇宙として」存在している「現実を凝縮したプリズム」であると、ムントは続けて述べている。Ebd., S. 360. ロマンよりも小規模で単純な内容にノヴェレの特徴を見る見方は、小説の多様さについて確認する際に参照した 1827 年の事典における「ノヴェレ」の記事にも共通している。Vgl. Art. Novelle. In: *Allgemeine deutsche Real-Encyclopädie für die gebildeten Stände. (Conversations-Lexikon.) In zwölf Bänden. Siebenter Band. Leipzig 1827, S. 935-936.*

³⁷ 社会問題という言葉が、ハイネの散文旅行記『ルテーツィア』においてはじめてドイツ語圏で使用されたという指摘は、こうした語彙の流入過程の本質的な一面を示している。Vgl. Geck, L. H. Adolph: *Über das Eindringen des Wortes „sozial“ in die deutsche Sprache.* Göttingen 1963, S. 35.

³⁸ Vgl. Edler, Erich: *Eugène Sue und die deutsche Mysterienliteratur.* Teildruck der Diss. Berlin 1932. ヴィンターによる 1934 年の博士論文もまた社会小説に関する最初期の研究ではあるものの、その内容は国民社会主義的なイデオロギーに満ちており、今日の研究では参照されることがない。Vgl. Winter, Franz:

うに『パリの秘密』は当時から社会小説と見なされていたが、研究論文そのものの題名に掲げられているのは「秘密文学」という呼称である。またエードラーは、ここで「社会的 (sozial)」という語の同時代性にも注目していない。社会小説が研究史上初めてそのジャンル名称で扱われたのは、ドイツの社会主義作家エルンスト・ドロロンケ (1822-1891) に関するエードラーの論考においてである。³⁹ その最初のページではドロロンケの文学史上の立ち位置が「短編社会小説 (d[ie] soziale[] Novelle) とそれに伴うある新しい文学ジャンルの水先案内人」⁴⁰ として示されている。シューのような先駆的な社会小説作家たちとの比較を通して、エードラーはドロロンケを初期のドイツ社会小説の作家に分類した。

エードラーの論考がドロロンケを中心にしてドイツにおける初期社会小説の文脈に言及しているのに対し、同年に刊行されたキルヒナー＝クレンペラーの学術論文ではエルンスト・ヴィルコム (1810-1886) やローベルト・プルッツ (1816-1872) といった他の社会小説の作家が扱われている。⁴¹ この研究では作品テキストに関わる言葉の歴史性について部分的に言及されている。例えば、英語の「ストライキ (strike)」という言葉が当時流入したことにより成立したドイツ語としての「ストライキ (Streik)」を、キルヒナー＝クレンペラーは労働問題の主題化の副次的作用として説明している。⁴² ただし、「社会的 (sozial)」という形容詞には言及がない。

社会小説の内容面を集中的に研究したエードラーやキルヒナー＝クレンペラーの論考とは異なり、マクイネスは同ジャンルの理論的立場を更に古いジャンルであった教養小説との関連から導出している。⁴³ 19世紀前半におけるこうした小説理論の展開と、その中で評価された新た

Das deutsche Volk bei der Arbeit. Zur Geschichte des sozialen Romans um die Mitte des 19. Jahrhunderts. Diss. Wien 1934. また、社会小説研究史上にヴィンターの論文を位置づけた研究として以下を参照。Halter, Martin: *Sklaven der Arbeit. Ritter vom Geiste. Arbeit und Arbeiter im deutschen Sozialroman zwischen 1840 und 1880.* Frankfurt am Main / Bern 1983, S. 10.

³⁹ Vgl. Edler, Erich: Ernst Dronke und die Anfänge des deutschen sozialen Romans. In: *Euphorion* 56 (1962), S. 48-68.

⁴⁰ Ebd., S. 48. ドロロンケの短編小説集『民衆の中より (Aus dem Volk)』(1846) は彼の主要作品のひとつとして認識されており、それゆえエードラーはここで「短編社会小説」という呼称を用いていると考えられる。

⁴¹ Vgl. Kirchner-Klemperer, Hadwig: Der deutsche soziale Roman der vierziger Jahre des vorigen Jahrhunderts, repräsentiert durch Ernst Willkomm und Robert Prutz einerseits und Alexander Sternberg andererseits, unter besonderer Berücksichtigung seiner Beziehungen zum französischen Roman. In: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Humboldt-Universität zu Berlin* 11, 2 (1962), S. 241-280.

⁴² Ebd., S. 243. また別の箇所では、1830年代のドイツ文学に見受けられる「引き裂かれた者たち (die Zerrissene)」や「ヨーロッパ疲れ (die Europamüde)」のような標語が、社会小説の初期の作家であるヴィルコムの作品においては、登場人物間の会話シーンで明瞭に用いられているという指摘がなされている。Ebd., S. 249.

⁴³ Vgl. McInnes, Edward: Zwischen ‚Wilhelm Meister‘ und ‚Die Ritter vom Geist‘: zur Auseinandersetzung zwischen Bildungsroman und Sozialroman im 19. Jahrhundert. In: *Deutsche Vierteljahresschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte* Jg. 43 (1969), S. 487-514. 1953年に初版が刊行されたハウザーの研究書でも、社会小説はゲーテの長編小説の延長線上で捉えられている。Vgl. Hauser, Arnold: *Sozialgeschichte der Kunst und Literatur.* München 1975, S. 779. ただしここで社会小説作家と見なされる

な文学作品を本文の中で指し示す彼の議論は、19世紀における小説の歴史を教養小説からリアリズムへと通じる一つの流れへと収斂させるに留まっており、結局のところ論文名に掲げられている社会小説の固有の位置に関する言及は、結論部からも抜け落ちている。⁴⁴ 小説に関する理論の歴史的な脈に限定して展開された同論においても、ジャンル名称自体の歴史性が注目されることはなかった。

1970年代に入るとミルケライトが、研究史上はじめて明確に社会小説の概念としての側面に触れることとなった。彼女は企業家たちのイメージを「特定の社会的変化、社会的諸現象に関する証言としての文学作品」⁴⁵ を用いて調査しようと試みた。そこでは、社会小説の本質が「社会的理念と社会の現実との不一致」を告発する点に依拠して以下のように定義されている。

本研究の意味合いにおける「社会小説」の概念の下で全く一般的に理解されるのは、その都度有効な社会体制とは別に、社会的理念と社会の現実との不一致を可視化する小説文学である。あるいは別の表現に置き換えてもいい。社会小説は社会問題、すなわち文学的、政治的領域におけるその時の社会組織の社会的な緊張に、表現を与える。社会問題の根源が資本主義の中に存在しないのと同様に、社会小説は市民的資本主義的社会に対するマルクス主義者の批判によって初めて開始されたわけではない。この二つはマルクスを通じて、やっと本質的な力点の移動を受けたのだが、それはマルクス以前の社会主義者たちがすでにこの上なく明瞭に形づくっていたものであった。⁴⁶

この引用は注釈からのものであり、その中ではエードラーのドロンケ論が先駆的研究として言及されている。社会小説というジャンルの定義を試みたという点で、ミルケライトは社会小説研究における固有の問題領域を開拓したといえる。

ミルケライトの研究の二年後に刊行された、ゼングレの記念碑的な三巻本の研究書『ビーダーマイヤー時代』第二巻の中には、「社会小説 (Sozialroman)」と題された独立した節が存在する。⁴⁷ このことは、社会小説研究が継続されてきたことで同ジャンルが文学史の中で一定の認知を得たことのひとつの証左である。同シリーズは今日においてなお、19世紀中葉のドイツ文学を研究する上での最重要文献の一つに数えられる。その中で社会小説というジャンル名のもとに分類された文学作品群は、しかしながらゼングレの研究においては表面的にしか扱われて

のは、スタンダールやディケンズ、トルストイといったドイツ国外で19世紀に活躍した作家たちである。

⁴⁴ Vgl. Ebd., S. 513f.

⁴⁵ Vgl. Milkereit, Gertrud: *Das Unternehmerbild im zeitkritischen Roman des Vormärz*. Köln 1970, S. 3.

⁴⁶ Ebd., S. 20.

⁴⁷ Sengle, Friedrich: Sozialroman. In: Ders.: *Biedermeierzeit. Deutsche Literatur im Spannungsfeld zwischen Restauration und Revolution. 1815-1848*. Bd. 2, Stuttgart 1972, S. 886-892.

いない。また彼は、社会小説における社会主義的な性質に対して批判的な姿勢を取っていた。⁴⁸ 工業化を批判する点が、エードラーらの研究で社会小説の大きな要素と見なされていることを考慮すると、そのようなゼングレの理解は不十分だと言わざるを得ず、『ビーダーマイヤー時代』における社会小説というジャンルの素描は、ゼングレ自身が言及こそしていたものの、その「論争の余地がある」⁴⁹ 側面に触れないままであった。

小説理論と小説批評を扱ったシュタイネッケの二巻本の研究は、社会小説研究の学問的な基盤構築に決定的な役割を果たしたといえる。⁵⁰ 一章を割いて彼は、19世紀中葉の作家と批評家における自由主義的な諸々の理念と、社会小説というジャンルとの結びつきについて記述している。ここで彼は、文芸批評と小説テキストの豊富な資料群を駆使し、マクイネスの研究をはるかに凌駕する規模で、文芸ジャンルの発展の充実した概観を提示することに成功した。また彼は、社会小説批評からリアリズムの理論への連続性にも触れていた。⁵¹

対して1932年の博士論文を抜本的に書き改めたエードラーの研究書は、社会小説研究のパイオニアの手によるものの、問題を含んでいる。⁵² 彼の研究においては、18世紀の啓蒙主義的教育学者であったペスタロッチやザルツマンが、その教育的意図のもと執筆された小説作品ゆえに、社会小説の先駆者として位置付けられている。これはエードラーが作家の社会批判的な姿勢を社会小説の本質的な内容物として重要視していたことに起因する。⁵³ 彼はしたがって、社会小説という言葉の19世紀における新しさには目を向けていない。

以上を踏まえると、1970年代を通して社会小説研究は、初期の工業社会の諸相を作品から読み解くものから、豊富な資料によって同時代の文脈を再構築する営みへと研究の方向を変化させていったといえる。このような取り組みを経たことで、1980年代には同ジャンルに関する様々

⁴⁸ Vgl. Ebd., S. 889f.

⁴⁹ Ebd., S. 889. ここでゼングレは、「三月前期における議論の余地の多い社会小説 (ein[] diskutabl[er] Sozialroman) を探そうとすると、この言葉が常に想起されるように感じる」と、社会主義的と見なされることの少ないゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』(1829)を社会小説の先駆と見なす批評家カール・ローゼンクランツの発言について述べ、社会小説が表す政治的立場が一樣でないことを、暗示的に述べている。

⁵⁰ Vgl. Steinecke, Hartmut: *Romantheorie und Romankritik in Deutschland*. Bd. 1. Stuttgart 1975, S. 152-179.

⁵¹ 研究対象の拡大という意味では、文学のみならず造形芸術をも対象にして社会問題の表現について論じたガーフェルトの二巻本も、先行研究の中で独自の位置を占める。ただし彼女の概念定義に関する視座は、ただ社会問題という語にのみ向けられている。Vgl. Gafert, Karin: *Die soziale Frage in Literatur und Kunst des 19. Jahrhunderts. Ästhetische Politisierung des Weberstoffes*. Kronberg 1973, S. 2.

⁵² Vgl. Edler, Erich: *Die Anfänge des sozialen Romans und der sozialen Novelle in Deutschland*. Frankfurt am Main 1977.

⁵³ ただしエードラーは、三月前期の書評記事の中で「長編小説 (Roman)」と「短編小説 (Novelle)」が区別せずに使用されることを指摘し、同時代におけるジャンル付けの一側面を捉えている。当時の作品の題名において「社会小説」と「短編社会小説」とは並立していた。このことを踏まえ自身の研究における社会小説の定義づけを行う姿勢からは、その歴史的背景にまでは目が向けられていないにせよ、エードラーがジャンル名称の曖昧さを意識していたことがうかがえる。Vgl. Ebd., S. 18.

な批判的研究が公刊され始める。しかし同時に研究者たちの間では、社会小説を定義することの困難さという新たな問題が出現することとなる。

社会小説というジャンルの全体像を巡る 1970 年代までの議論は、その大部分が社会小説研究のパイオニアであるエードラーによって導かれてきた。そこに新しく複数の提案を投げかけたという点で、1980 年代以降にハンス・アードラーが果たした役割は大きい。その最初の一步は、三月前期の社会小説を対象とする、彼の言うところの記号論的分析であった。⁵⁴ ロトマンやクリステヴァらの記号論的、構造主義的文学論に依拠したこの試みは、明らかに当時までの社会小説研究の傾向を越え出るものであった。しかしそうした研究手法にもかかわらず、著者自身の主観的な判断が隠れていることは否定できない、とその後の研究では指摘されている。⁵⁵ その創発的な見方にもかかわらず、あるいはまさしくそのせいで、アードラーの研究はのちの社会小説研究者から多くの批判を受けることとなり、⁵⁶ 概念定義という本稿の問題意識に照らし合わせても、アードラーの主張は先に触れたミルケライトの水準に留まっている。

初めて概念としての「社会小説」が問題視されるのは、アードラーの意味論的分析の三年後に刊行されるマルティン・ハルターの研究書を待つこととなる。⁵⁷ 第一部の導入でハルターは、彼の社会小説理解を前もって説明している。「社会小説 ([der] Sozialroman)」というジャンル名称を彼は「市民社会の社会的、政治的、イデオロギー的同一性に対して資本主義的な工業化がもたらした帰結を批判的に論じる政治参画した散文のジャンル」⁵⁸ として理解している。しかし彼によれば、「社会小説」という概念は限定して把握されなければならないという。ハルターは「社会的文芸 ([die] soziale Poesie)」を、当時の社会生活に取り組んでいると同時代人が考えた文学とする。⁵⁹ しかしそれは客観的な社会的現実の描写を意味しない。文士たちは、社会の欠陥を強調し、市民社会の読者の同情を誘うことを目的としていたからである。⁶⁰ この見方に

⁵⁴ Vgl. Adler, Hans: *Soziale Romane im Vormärz. Literatursemiotische Studie*. München 1980.

⁵⁵ Vgl. Halter, a. a. O., S. 22. [Anm. 11].

⁵⁶ すでに本稿で引用しているハルター以外では、シュトライトもアードラーの研究の誤りを指摘している。「アードラーがここで同時代の〈言説〉として挙げ、彼によって調査されたテキストを関係づけているものは、社会問題や、その解決のための時局に即した諸項目の「歴史的現実性」の記述なのだが、それは本当のところでは、調査の枠組みには反映されていない社会の表象や歴史に対する彼自身の理解に拘束されている」。Streit, Claudia: *(Re-)Konstruktion von Familie im sozialen Roman des 19. Jahrhunderts*. Frankfurt am Main 1997, S. 23.

⁵⁷ ハルターの研究と同年にエードラーは、社会小説の概要をまとめた論考をドイツの長編小説に関する概説書に寄稿している。その記述においてはしかしながら、どこにジャンルの境界線が引かれるかということが問われていない。Vgl. Edler, Erich: *Der deutsche soziale Roman um die Mitte des 19. Jahrhunderts*. In: Koopmann, Helmut (Hrsg.): *Handbuch des deutschen Romans*. Düsseldorf / Basel 1983, S. 356-369. ここからも、社会小説のジャンル定義が 1980 年代に至るまでおおそ問題視されていなかったことがうかがえる。

⁵⁸ Ebd., S. 3.

⁵⁹ Ebd.

⁶⁰ Ebd., S. 7.

従えば、三月前期の社会小説と傾向文学は同じ類のものであるといえるため、ハルターの議論には、社会小説を三月前期に活躍した急進的文学グループである「若きドイツ」の作家たちの批評の延長線上に位置づけようとする傾向が強い。加えて彼は 1830 年代から 1880 年代にかけての社会小説と小説批評を、かつてのマクイネスのように古典主義からリアリズムへと至る一般的な文学史の文脈の中で論じている。そのため、19 世紀中葉における社会小説の独自性を十分には論じられていない。このように 1980 年代には、社会小説に関する一卷本の規模の研究が二冊登場したが、ジャンル名称の歴史性それ自体の解明はまだ先送りにされていた。

ところで、1990 年代以降本主題に関する規模の大きい研究文献や博士論文は、管見の限り公刊されていない。2009 年にゲルマニスティックの方法論としてのジャンル論について解説したジーゲルによれば、現代のジャンル理論、ジャンル史の観点からはジャンルの規範的な原理原則は時代遅れと見なされており、今日のジャンル論の課題は「生産と受容の状況を追跡したり〔中略〕実践を通してジャンルの体系が構想されることを重視し、個々のジャンルの微視的な記述に向かう」ことにあるという。⁶¹ だとすると、社会小説は、ジャンル論全体の流れを先取りするかたちで、すでに個別ジャンルとしての分析の対象となっていたといえるかもしれない。また生産と受容の歴史に関しても、これから述べるように 1990 年代前半には網羅的な研究が為されていた。⁶² 加えてドイツ語圏のジャンル史全体に関する 2015 年の研究書では、文学ジャンルは文学史の枠を超え、「類概念の文化史」の構成要素として捉え直されている。⁶³ 社会小説というジャンルを主題に据えた研究は、このような立場からすると文学研究の枠組みに留まり新規性に乏しいといえるだろう。このような事情から、最新の社会小説研究として以下では 1990 年代までの研究に即して、概念定義の論じられ方を追うこととする。

1990 年代には、ハンス・アードラーが編著者となって、社会小説に関する新たな研究書がはじめて刊行される。そこには、19 世紀における当該ジャンルの代表的な定義を示す複数の同時代文献からの引用と並んで、作品テキストに関する多様な論文が収められた。⁶⁴ すでにそれ以前の研究で言及されているように、アードラーは文学史における社会小説に関する乏しい見識

⁶¹ Siegel, Eva-Maria: *Gattungstheorie und -geschichte*. In: Schneider, Jost: *Methodengeschichte der Germanistik*. Berlin / New York 2009, S. 171-194, hier S. 171f.

⁶² こうした生産と受容に関する研究は、2000 年代に入っても個別の論文のかたちで継続されており、例えば以下の 2014 年の論文はウィーン民衆劇の作家ネストロイによるシュアの『パリの秘密』の生産的受容を扱っている。Vgl. Bachleitner, Norbert: „Die Mängel des sozialen Lebens geißeln“. Johann Nestroy und Eugène Sue. In: Danielczyk, Julia / Tanzer, Ulrike (Hrsg.): *Unerwartete Entdeckungen. Beiträge zur österreichischen Literatur des 19. Jahrhunderts*. Wien 2014, S. 98-111. こうした社会小説の細かな生産・受容状況の研究が現在の社会小説研究に残されたひとつの方向であることは間違いないだろう。こうした傾向に対し本論は、第三章で述べられるように、ジャンル名称の歴史的側面を加味した分析を新たに提案する立場をとる。

⁶³ Vgl. Michler, Werner: *Kulturen der Gattung. Poetik im Kontext, 1750-1950*. Göttingen 2015, S. 10.

⁶⁴ Vgl. Adler, Hans (Hrsg.): *Der deutsche soziale Roman des 18. und 19. Jahrhunderts*. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1990.

について述べている。その理由の一つとしてアードラーは、「社会小説」という概念の多形性を挙げている。たしかに、「社会小説の中で社会的な諸問題の物語表象を期待すること」はある程度は正しいものの、「その食い違いの理由は様々な面にある」とアードラーはいう。⁶⁵ 同時代の概念定義からのいくつかの引用に続けて彼は、社会小説というジャンルを以下のように特徴づけている。

ジャンル定義の問題は少なからぬ部分で、小説という概念ではなく、ただ「社会的なもの ([das] Soziale[]）」という概念が構成に含まれているように見えることのうちにある。小説はその際、形式的な定数として機能し、「社会的なもの」が内容的な変数として機能する。この意味において社会小説は、その内容物によって定義され、研究はここに重点を置いてきたのである。⁶⁶

以上のようにアードラーは、「プロレタリアの性質の決定的な関与」⁶⁷ に社会小説の基準を設けるアードラーの社会小説理解と、リールら複数の同時代人の理解との食い違いについて、その「社会的 (sozial)」という形容詞の意味内容の不一致に基づいて主張する。アードラーが正確にこの小説ジャンルの歴史的な多形性を認識していることはまた、同書における「同時代の概念定義」という章でも示されている。そこには 1844 年から 1886 年までの文学に関する記事からの引用が収録されており、この時期に社会小説は「はじめてジャンルとして理論的に」⁶⁸ 成立したと語られる。そのため、概念定義に関する短い引用は同書の論考で扱われる議論全体の大枠でもある。こうした研究書の構成自体が、社会小説が 19 世紀半ばになって新たに成立した時代に条件づけられたジャンルであるという、研究史上の新たな問題意識を表現しているといえるだろう。

上述のアードラーの編著と同じく 1990 年にはバッハライトナーが、社会小説に関する重厚な資料集を公刊しており、その中にはドイツ国外の社会小説の翻訳物に言及した同時代の文献や、国際的な視野から書かれた文芸批評、そしてディケンズやシュー、ゾラといった代表的な社会小説作家たちの作品に関する数多くの書評がまとめられている。⁶⁹ スタンダールやサッカレー

⁶⁵ Ebd., S. 3.

⁶⁶ Ebd., S. 4. 強調は原文。

⁶⁷ Edler (1977), S. 19. Zitiert nach Adler (1990), S. 4.

⁶⁸ Ebd., S. 15.

⁶⁹ Vgl. Bachleitner, Norbert (Hrsg.): *Quellen zur Rezeption des englischen und französischen Romans in Deutschland und Österreich im 19. Jahrhundert*. Tübingen 1990. 英語圏での「社会小説 (social novel)」やフランス語圏の「社会小説 (le roman social)」のジャンル名称の歴史性に関する研究は、本論の知見を踏まえ今後論じられるべき課題とする。各国語の名称については以下の古典的な研究を参照した。Cazamian, Louis François: *The social novel in England. 1830-1850. Dickens, Disraeli, Mrs. Gaskell, Kingsley*. Übersetzt von Martin Fido, London 1973.; Ders.: *Le roman social en Angleterre*. Paris 1934.

といったその他の重要な作家に関する文献や書簡、また作家個々人の日記において開示される社会小説への見解については手が付けられていないものの、⁷⁰ 作品受容の具体的な状況を知るための基盤を質的にも量的にも大幅に改善させたことは彼の功績だと言えよう。

バッハライトナーによる社会小説の受容史研究は、1993年の研究によってさらに拡大されることとなる。同書における彼の目的は、社会小説をドイツにおける受容との関係で捉え直すことにある。⁷¹ バッハライトナーは同書で、「社会小説」の概念の問題をその「使い勝手の良さ (Beliebigkeit)」に着目して把握している。⁷² 同時代の批評家たちがあまりにも広い意味で理解していた社会小説に対して彼は、作品受容の実態を示すテキスト群の記述を幅広く取り上げることで、更なる理解を得ようとした。⁷³ 社会小説の受容状況に対するバッハライトナーの考察は、こうした実証的な接近を目ざしたがゆえに、当然だが作品解釈には踏み込まない。彼の二つの大著は結果として、ドイツの同時代の文脈のうえで社会小説の定義をひとまとめにするものの難しさを決定的に印象付けた。そうした彼の詳細な調査と比較するならば、社会小説という見渡すことのできない文化的事象についての同時代における定義の把握を、代表的な同時代テキストの抜粋という形をとって試みたのがアードラーであったといえるだろう。

こうした研究状況を前にしてシュトライトは、社会小説に関する今日なお最新のものとされる1997年の研究書の中で、同ジャンルの歴史的側面を新たに測定しようとした。コント、スペンサー、シェフレ及びリールといった学者たちによる19世紀の先駆的かつ歴史的な社会学的著作に関する概観を、彼女はとりわけ社会における家族の役割という視点から描き出す。そのような意図のもと分析される複数の社会小説においては、上述の学者たちの著作により特徴づけられた家族の機能化の様相が読み取られていく。研究の変容に対する考察を踏まえシュトライトは、「社会小説」の概念について述べる。その際の彼女の立場は、社会問題の解決という主題から作品を解放すべきだというものである。「分析されるテキストが、どのような言説と意味深いかたちで関係を結んでいるのか」⁷⁴ という問題こそが重要だと述べるシュトライトの研究は、当該ジャンルを分析する上での新たな社会史的接点を新たに打ち出しているものの、その点は結果的にジャンル定義の問題の放置にもつながっているといえる。

3. 「定義し難い」社会小説が有する研究の可能性——シュティフターを例に

第二章で通覧したように、先行する社会小説研究においてジャンル定義の問題は、分析の対

⁷⁰ Ebd., S. XIVf.

⁷¹ Vgl., Bachleitner, Norbert: *Der englische und französische Sozialroman des 19. Jahrhunderts und seine Rezeption in Deutschland*. Amsterdam 1993, S. 1.

⁷² Ebd., S. 3.

⁷³ Vgl. ebd., S. 9.

⁷⁴ Streit, S. 18.

象が特定の作品から批評テキスト、受容現象を形づくる種々雑多なテキスト群へと拡大していくなかで、ますます困難なものとして認識されていくこととなった。こうした同時代資料の充実とその分析により浮かび上がった「社会小説」の意味内容の定義し難さは、実のところ第一章で得られた知見とともに、このジャンルに特有な形での新たな研究の可能性を指し示しているように思われる。本章では、19世紀オーストリアの作家アーダルベルト・シュティフターの証言に目を向け、この仮説を検討する。

まずその前提として、今日までのドイツ語圏社会小説研究は大抵の場合、ドイツの作家たちの記述に基づいていたことを確認しておく必要があるだろう。オーストリアの作家による社会小説への言及は、これまで研究者の視野から外されてきたか、ごく小規模なものに留まっていた。理想と現実の間の相違を指し示す社会小説の主題の多くが、当時のヨーロッパ随一の厳格な検閲のために、オーストリアでは書くことを許されていなかったからである。⁷⁵ にもかかわらず、実際にはオーストリアにおける『パリの秘密』と、同じくシューが手がけた『永遠のユダヤ人』の需要は高かったとされている。同時代資料中のある証言によれば、検閲は「(我々が飽きるほど読んできたにもかかわらず) 我々に『パリの秘密』をいくつかの他の大都市の秘密と同様に、最も厳しく禁じてきた」という。⁷⁶ 社会小説研究では注目されてこなかったものの、19世紀半ばのウィーンで活躍した詩人たちの間で社会小説が口の端に上ることもあった。保守的で悲観主義的な作家であったグリルパルツァーは、シューの小説に対するコメントを残しており、⁷⁷ そのグリルパルツァーに高く評価された女性詩人のベッティ・パオリは、社会小説の書き手として知られていたジョルジュ・サンドについての賞賛をある書簡の中で露わにしている。⁷⁸ そしてパオリがその手紙を宛てた人物であるシュティフターは、担当編集者に宛てた異なる二つの書簡の中で、社会小説というジャンルに言及している。貴族的あるいは市民的価値観の中で作家として生活していたこれらの作家たちが、オーストリアという場所でどのように社会小説を理解していたのかについては、先行研究の知見を参照しつつ、一次文献や同時代資

⁷⁵ オーストリアでは『パリの秘密』とその模倣作『ブリュッセルの秘密』が、1842年12月後半の出版禁止目録に名を連ねていた。刊行の禁止は作品を読むことのみならず、それに関する文学的議論をも妨げることとなった。Vgl. Bachleitner (1993), S. 116.

⁷⁶ Mayer, Gustav: *Sociale und politische Zustände Oesterreichs mit besonderer Beziehung auf den Pauperismus*. Leipzig 1847, S. 101. Zit. nach Bachleitner (1993), S. 120.

⁷⁷ 「新しい犯罪事例集は、凄惨さが本物であるという長所を持っている。そして人間の自然が深みに落ちていくさまを観察することは、私にとって興味深い。しかし『パリの秘密』は発明された代物であり、刑務所のための読み物である。方向が全く悪いということではなく、随所には道徳的な狙いすらほのかに見えるのだが、人々は結局、その全てが取るに足らず、しかもあまり悪くないと考えてしまう」。Foglar, Adolf: *Grillparzer's Ansichten über Literatur, Bühne und Leben*. Stuttgart 1891, S. 28.

⁷⁸ 「サンド作品に関連したあなたの挑戦を私はお受けしますが、まずは彼女の著作のどれをあなたがご存じかを私は知らなくてはなりません。といいますのもあの素晴らしき女性は、個別の作品に従ってではなく、その全体的な発展の軌跡に従って評価されなければならないからです」。Stifter, Adalbert: *Sämtliche Werke*. Bd. XXIII. Briefwechsel. 7. Band, Hrsg. v. Gustav Wilhelm. Hildesheim 1972 S. 38f.

料に即して分析する余地が残されているといえよう。

とりわけシュティフターは、その近年の研究傾向から注目に値する作家である。現在のシュティフター研究では、1990年代に主流となったテキストの記号的側面を巡る解釈の取り組みが継続されながら、同時代的基盤からの見直しも盛んに行われており、その際文学史的な観点からの考察は、シュティフターと同時代の作家たちとの比較や、リアリズム文学の潮流に引きつけた作品の歴史的な位置づけの再検討を主軸としている。⁷⁹ 初めて社会小説に言及した時、シュティフターは友人のパオリが「社会小説 (de[r] sociale[] Roman) に専心する」⁸⁰ という彼の願いを表明している。また彼は、のちに長編小説『晩夏』(1857)へと結実する構想途中の小説を「社会小説 (de[r] sociale[] Roman)」と呼んでいた。⁸¹ 先行研究において、前者の証言は分析の対象にされること自体少ない。後者の証言はそれに対して、シュティフターの代表作の成立背景に関わっていることもあり、しばしば言及されてきたが、ここまで確認してきたような社会小説研究の知見に則って扱われることはなかった。⁸² 比較的新しいジャンル研究として先に挙げたものにおいても同様で、作家の発言は言及こそされど、等級や類概念による文化的秩序それ自体をめぐる省察へと向かうテキスト解釈が目指されている。⁸³

ムントやハイネのような進歩的作家と比べると、シュティフターは当時だけではなく後年の研究においてもグリルパルツァーと同様の非政治的な作家として認知されていた。実際シュティフターが自ら、ハイネら「若きドイツ」の作家たちのように政治的な諸問題を詩作と混ぜ合わせることを拒否すると述べていたことはよく知られている。⁸⁴ しかし彼は、作家となる以前こそ韻文詩の創作に取り組んでいたものの、初期から晩年に至るまで自身の美的理想を散文の形式の中で表現しようとしていた。⁸⁵ こうした事実からも、「社会小説」というジャンルが19世紀当時、異なる政治的立場をもった様々な作家によって、その成立期における社会史的、小説理論的な背景から、ある特別な表現形式として受け入れられていたということがうかがえる。

⁷⁹ 磯崎康太郎「シュティフター像の同時代への再接続 — シュティフター没後百五十年を迎えた研究の動向 —」：上智大学『ドイツ文学論集』55号(2018年)、283～305頁所収、とくに292～299頁を参照。

⁸⁰ Stifter, Adalbert: *Sämtliche Werke*. Bd. XVII. Mit Benutzung der Vorarbeiten von Adalbert Horcicka. Hrsg. v. Gustav Wilhelm. Briefwechsel. 1. Band. 2. Aufl. Hildesheim 1972, S. 287.

⁸¹ Stifter, Adalbert: *Sämtliche Werke*. Bd. XVIII. Briefwechsel. 2. Band. Hrsg. von Gustav Wilhelm. 2. Aufl. Hildesheim 1972, S. 165.

⁸² Vgl. Christoph Buggert: *Figur und Erzähler. Studie zum Wandel der Wirklichkeitsauffassung im Werk Adalbert Stifters*. München 1970, S. 280.; Rudolf Wildbolz: *Adalbert Stifter. Langweile und Faszination*. Stuttgart 1976, S. 112.; Lindau, Marie-Ursula: *Stifters Nachsommer. ein Roman der verhaltenen Rührung*. Bern 1974, S. 39; Matz, Wolfgang: *1857: Flaubert, Baudelaire, Stifter*. Frankfurt am Main 2007, S. 305.

⁸³ Vgl. Michler, a. a. O., S. 440-458.

⁸⁴ Epping, Walter: *Stifters Revolutionserlebnis*. In: *Weimarer Beiträge* 1 (1955), S. 246-260, hier S. 249.

⁸⁵ ゴットヘルプやシュティフターのような、進歩主義的ではない作家たちもまた、散文の物語文学に取り組んでいたのは、「これがおそらく、その時代に現れた、散文との関係における作家の意図を超えた変化」を暴き出しているからだ、とゼングレは指摘している。Vgl. Sengle, a. a. O., S. 16. 強調は原文。

作家シュティフターの政治性に関しては、小説の解釈を通して、彼独自の政治的なるものに歩調を合わせる発想が 2005 年の研究で提案されている。⁸⁶ 社会小説というジャンルはその際、同時代に広範な作家、読者の認知を得ていたがゆえに、文学の政治性に対する彼の見方を測る尺度として、作品解釈を補助する可能性を秘めているのである。また、社会小説というジャンル名称は、本論第一章で確認したように、一方では意味の不確かな言葉として、他方では同時代の文学言説として捉えられていたため、複層的な定義し難さを有している。このような研究状況下では、言葉そのものがテキスト内で付与される意味内容と、その言葉の歴史上の言説としての側面を区別しながら、ときにそれらを組み合わせる議論が求められる。ここ数十年のシュティフター研究は、こうした論点に合致するかのように、テキスト上の二項対立関係や記号的側面に集中した読解と、同時代言説との相対的な関連の中での作品解釈が行われてきたといえ、彼の作品テキストと社会小説との関係を現在のシュティフター研究の傾向に則り分析することは、社会小説というジャンル概念の定義し難さを積極的に扱う新しい社会小説研究にもなり得るのである。

おわりに

本稿では、「社会小説」というジャンル概念が実際には 19 世紀中葉のドイツ社会における特定の語彙の流入と密接に結びついており、そのジャンル定義が、呼称の成立過程と研究史において異なる階梯でその多義性を増大させていったことを明らかにした。

第一章では、19 世紀における社会小説という言葉の歴史性に光を当てた。同世紀の前半にはドイツの知識人たちの間に、多様かつ時代に特有な表現形式として散文を高く評価する意見が広まった。「社会小説」という文学的な概念は、その成立期において新たに評価された文学形式と、新たなドイツ語の形容詞によって構成されていたのである。そして第二章では、先行研究において当該ジャンルのより明確な定義が繰り返し試みられてきたことを確認した。研究の流れが文学史的な作業から受容状況の調査へと変容していくなかで、ジャンル定義の問題は次第に、明快な解決が不可能なものとなされていった。社会小説というジャンルを考察する際には、「社会的」という言葉の社会史的な文脈を重視するだけでなく、当時の散文理解との関係にも目を向けるべきである。それによって、当該ジャンルの歴史的な独自性をより正確に把握することができるだろう。またそのような研究の視座は、これまでの研究では視野の外に置かれていた作家によるこの定義し難いジャンル概念への言及について考察することをも可能にすると思われる。そのような研究の可能性を、例えばシュティフターのような作家の作品解釈を通じて検証していくことが、取り組まれるべき課題となる。

⁸⁶ Vgl. Lengauer, Hubert: *Stifter und die Politik*. In: *Jahrbuch des Adalbert Stifter-Instituts des Landes Oberösterreich* 12 (2005), S. 113-121, hier S. 113.

Ein schwierig zu definierender Gattungsbegriff
— Kritische Bemerkungen zur Forschungsgeschichte des deutschsprachigen
sozialen Romans —

SUGIYAMA Toyo

Die kulturellen, sozialen und historischen Hintergründe des deutschsprachigen sozialen Romans sind in der Forschung schon viel diskutiert worden. Die neuere Forschungsliteratur beschäftigte sich auch unter verschiedenen Aspekten mit der Problematik der Begriffsbestimmung „sozialer Roman“. Wenig beachtet blieb dabei aber die Vieldeutigkeit der Gattungsbezeichnung schon zum Zeitpunkt ihrer Entstehung, was mit dem Eindringen des Wortes „sozial“ in die deutsche Sprache etwa in der Mitte des 19. Jahrhunderts zusammenhängt. Um die Schwierigkeiten zu verdeutlichen, die es bereitet, eine tragfähige Definition der Gattung zu finden, befasst sich die vorliegende Abhandlung mit den frühesten Diskursen zum sozialen Roman sowie mit den bisherigen Definitionsversuchen.

Die theoretische Auseinandersetzung mit dem sozialen Roman begann in den deutschsprachigen Ländern in der ersten Hälfte der 1840er Jahre. Muster für diese neue Gattung war die zeitgenössische Literatur in Frankreich wie z. B. Eugène Sue's *Les mystères de Paris* (1842/1843). In seiner Rezension zu Sues Roman erläuterte der Junghegelianer Karl Grün den Charakter des sozialen Romans anhand von Begriffen wie „soziale Kritik“ oder „soziale Welt“. Nach dem Scheitern der Revolution von 1848 definierten der Kulturhistoriker Wilhelm Heinrich Riehl und der Ästhetiker Friedrich Theodor Fischer die Gattung neu, wobei sie sich von liberalistischen oder sozialistischen Ansätzen abwandten. Ihnen zufolge spiegelt der soziale Roman die Klassenordnung in der bürgerlichen Gesellschaft wider. Die Ambiguität der zeitgenössischen Gattungsbestimmung hing auch damit zusammen, dass es schon vor dem Auftreten deutschsprachiger sozialer Romane in den 1830er Jahren keine genaue Definition von „Roman“ im Generellen gab, sondern vielfältige literarische Formen mit diesem Etikett versehen wurden.

Die Forschung tat sich auch in der Folge mit der Gattungsbestimmung des sozialen Romans schwer. Kennzeichnend dafür ist, dass trotz einer langen Forschungsgeschichte seit

etwa 1930 Gertrud Milkereit erst 1970 versuchte, die Gattung präziser zu definieren. Davor konzentrierte sich der Forschungsdiskurs fast ausschließlich auf soziale Aspekte in Werken einzelner Schriftsteller wie z. B. Ernst Dronke. Ab den 1970er Jahren vollzog sich dann in der Forschung ein Wandel von der bloßen Analyse der innerhalb eines Werkes geschilderten industriellen Gesellschaft hin zu einer Rekonstruktion des jeweiligen zeitgenössischen gesellschaftlichen Kontexts. In der Folge wurden neuartige Untersuchungen zum sozialen Roman veröffentlicht, wie beispielsweise Hans Adlers „Literatursemiotische Studie“ aus dem Jahr 1980. Zugleich erkannte man, dass eine Definition des sozialen Romans auf Basis des rekonstruierten Kontexts allein nicht adäquat möglich ist. Die Vielgestaltigkeit des sozialen Romans wurde zunehmend erkannt, weshalb beispielsweise Norbert Bachleitner 1993 auf die problematische „Beliebigkeit“ des Gattungsbegriffs hinwies. Die bislang gesammelten Dokumente zum sozialen Roman erschweren eine eindeutige Definition der Gattung noch weiter, obwohl sie die Möglichkeit eröffnen, diese Romane aus verschiedenen spezifischen Perspektiven zu analysieren.

In der bisherigen Sozialromanforschung standen vor allem deutsche Schriftsteller im Zentrum des Interesses. Doch hat auch der österreichische Schriftsteller Adalbert Stifter in seinem Briefwechsel wiederholt diese Gattung erwähnt. Auf der anderen Seite wurde die Sozialromanforschung von der Stifterforschung bislang nur wenig zur Kenntnis genommen, obwohl deren Ergebnisse dazu beitragen können, Stifters Auffassung von dieser zeitgenössischen Gattung besser zu erfassen. Trotzdem erweist sich die jüngste Tendenz in der Stifterforschung als vielversprechend, neben der textimmanenten Interpretation auch die zeitgleichen gesellschaftlichen Diskurse mit einzubeziehen. Die dadurch gewonnenen Erkenntnisse können dazu beitragen, die Bedeutung des Wortes „sozial“ in einzelnen Erzähltexten Stifters und im historischen Kontext voneinander zu unterscheiden.